

# 教員のメンタルヘルス研究の背景と 動向に係わる文献レビュー

○尾崎杏奈<sup>1</sup>・山本 力<sup>2</sup>

(<sup>1</sup> 就実大学大学院教育学研究科・<sup>2</sup> 就実大学大学院)

## 問題の背景と目的

文部科学省によると、平成 11 年度の学校教師の精神疾患による休職者は 1924 名、平成 20 年度は 5400 名と、約 10 年間で 3 倍に増加。この状況に対し行政施策として教員のメンタルヘルスに関する実態調査の実施、多様な相談窓口の設置、復職支援プログラム等を実施してきた(文部科学省,2013)。このような実態は社会問題として認識され、研究論文も後追いのように増加してきた。そこで本論文では、教員のメンタルヘルス研究の動向に関する文献的な展望を行う。その上でストレス反応や抑うつ等の背景要因の一つとしての異動に焦点を当てた文献レビューを行いたい。

## 方法

CiNii で「教師・メンタルヘルス」「教師・異動」で検索。それぞれ 351 件と 29 件の論文がヒットし、その中から該当する論文に絞り概観した。

## 文献レビュー

### (1) 教師のメンタルヘルスに関する先行研究

教師のメンタルヘルスについて従来数多くの研究が行われた。教師に影響を及ぼすストレスサーに「多忙」、すなわち時間的忙しきや仕事の煩雑感を挙げた研究が多い(石川・中野,2001;山内・小林,2000)。赤岡・谷口(2009)はどのような人間関係にストレスを感じているのか調査した結果、同僚との「教育観」「価値観」の相違にストレスを感じると報告している。一方で、同僚はストレス対処資源システムとして有用性が高いと示した(中川ら,2000)。ストレス要因は教育現場だけでなく、山本(2013)は家族要因が潜在的に存在していると述べている。

これらの要因が複合的に絡み合うことで、バーンアウトやリアリティ・ショックに陥る。バーン

アウト研究では、年齢、性別、パーソナリティなど個人的要因を調べた研究(田尾・久保,1996;伊藤,2000;貝川,2009)、バーンアウト生起にどのような環境的要因が影響しているか検討した研究(上野・佐藤,2010;新井,1999)がみられる。また杉原(2012)は初任教師のリアリティ・ショックについて、教員養成と学校現場でのギャップから生じると述べている。

### (2) 教師と異動に関する先行研究

ストレス要因を、時間軸で捉えた場合、「異動」という観点がある。異動に関する研究として、異動後の困難を調査する研究や、異動後にバーンアウトに陥った教師を取り上げた事例研究などみられる(武智ら,2015;中島,2003)。山本(2013)は環境移行に伴う不適応を「植え痛み」と称し、保坂(2010)は教師にとって転勤は「危機」と述べている。國本(2016)は、教師のメンタルヘルス研究、教師の異動とメンタルヘルスに関する研究を概観し、異動はメンタルヘルス不調に陥るきっかけになりやすく、教師と異動のメンタルヘルスを関連させた研究には、さらなる詳細な研究の余地があると述べている。

## まとめ

教師と異動に関する従来の研究をみると”異動後”の状況に着目した研究がほとんど。”異動前”の内的・外的状況に焦点を当てたものはない。理由として異動後に不調をきたすことが多いため、異動後に焦点が当たりやすいと考えられる。異動後だけでなく、異動前から焦点をあてることで、「喪失と獲得」の混交経験としての移行経験に関する詳細な研究を行えるのではないかと考えられる。また異動後のメンタルヘルスの悪化を予防する上での示唆が得られるかもしれない。